



つながり

～やさしく かしく たくましく～

第3号

令和6年10月4日発行

山口大学教育学部附属幼稚園

運動会後の子どもの育ちから見たもの

副園長 高田 和 宜

10月になってようやく秋らしい気温になりました。2学期は猛暑が続く中で始まりとなり、運動会に向けての生活が例年通りにできない状態でしたので、運動会の体育館開催を決めました。急な変更にも関わらずご協力いただき、無事終了することができました。ありがとうございました。来年度以降も酷暑が続くことが予想されます。皆様からいただきました運動会後のアンケートを参考にして、運動会の時期、開催方法などを考え、小学校の授業や教育実習の日程とも調整しつつ、ブラッシュアップしていきたいと思えます。例年とは異なる運動会ではありましたが、例年と同様にその後の生活の中で運動会をしたことが活かされているなど感じられる子どもの姿がありましたので、お伝えしたいと思えます。

運動会後も園庭や遊戯室でリレーができる場を設けています。そこには星組に交じって風組も加わって楽しんでます。年長児が年中児に、トラックの中に入っはいけないことやバトンを投げずに手渡すことなどのルールを優しく教えたり少しのルールの逸脱は大目に見たりしながら、異年齢と一緒に楽しむ姿があります。風組の子どもにとっては、運動会で見た星組の子ども姿がモデルになっていることが「リレーをしたい」という意欲につながっているようです。星組の子どもにとっては、自分たちのリレーに入れてあげた風組が楽しんでいることが喜びになっていて、そこが素晴らしいと思えます。

雨の日にも遊戯室で短い距離の折り返しリレーがエンドレスのローテーションで行われていました。7、8人の星、風組の子どもが入り混じってリレーを繰り返しているうちに、他の遊びに移ったり、水分補給に行ったりする子どももあり、人数が減っていきました。残っていた風組2人と星組2人は走り続けていましたが、1回交代でへとへとになり「これいつが終わりなの？」と風組の子どもが疑問をもち、言いました。星組の子どもが「じゃあ3回にする？」と提案しました。二人ずつが代わる代わる走り、一人が2回ともう一人が1回走ってゴールとなりました。少しの差で両チームゴールすると「ひきわけじゃあ、次は4回にしよう！」とリレーを続けていました。自分たちでやりたい遊びを繰り返し続ける中で体も心も柔軟にたくましく育っているのが分かります。

星組はリレー以外に跳び箱や鉄棒にチャレンジしている姿も続いています。鉄棒は運動会前にも「逆上がりができるようになりたい」と友達と取り組む姿がありました。運動会前にできるようになった子どももいましたが、運動会当日は自信をもってできる前回りをしていました。鉄棒も跳び箱も小学校で学習するのですが、これは幼稚園で前倒しする良さをねらっているわけではありません。「繰り返し粘り強く挑戦することで上達する達成感や自信が持てる場」になればと思ひ保育者は関わっています。友達と一緒に取り組み、お互いのチャレンジする姿を見合うことで「できるかも」「やってみよう」という気持ち、いわゆる「やる気スイッチ」が押されます。特にこの園の子どもたちは友達が成功すると自分のことのように喜んだり、保育者や友達にその成果を伝えようとしたりする姿が多くみられます。友達が頑張っているようになったことを自分のことのように喜べる気持ちが素敵なことだと思えます。このような気持ちや体験が今後の共感性・協働性を高めていきます。

このように、行事をすることで終わりにせず、行事がその後の生活の充実につながる体験の機会となるように積み重ねていきたいと思えます。